

ミュージアム・アイズ

MUSEUM EYES

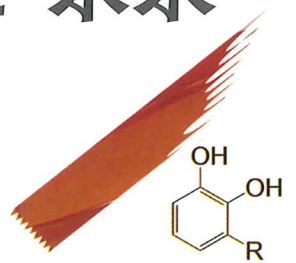
Vol. 56
2011

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

特集 明治大学創立130周年記念博物館特別展

漆器 JAPANWARE

文理融合型研究から見えてきた
漆の過去・現在・未来



- 博物館ニュース
- 展示&リサーチ 企画展「古瓦を追って—前場幸治瓦コレクション—」
- 市民レクチャー 小塚原の仕置場と志士の墓
- 学芸研究室から 玉里舟塚古墳出土馬形埴輪の評価
- 収蔵室から アラスカ学術調査団関連資料
- 南山大学協定通信・図書室から 目で見て楽しむ 江戸の洒落っ気
- 入館者数の動き・団体見学の記録・M2カタログ
- 博物館友の会から 工芸の会—漆工芸「乾漆」に挑む

彩色浅鉢形土器(縄文時代)高崎市教育委員会蔵
黒漆草花文漆絵椀(江戸時代)当館蔵
朱漆花文堆起漆供物器(19~20C・ミャンマー)浦添市美術館蔵
輪島塗金時絵層蘇器揃(20C末)当館蔵

漆器

JAPANWARE



文理融合型研究から見えてきた 漆の過去・現在・未来

会期 2011年6月18日(土)~7月31日(日)

空気に触れると時間をかけて固化する神秘の樹液 —— 漆(うるし)。

その性質を利用し、塗料として、あるいは^{ろでん}成形材、接着剤として活用することにより、我々の祖先は絢爛たる金蒔絵や螺鈿に象徴される輝かしい漆文化を作り上げてきました。

漆器の歴史は古く縄文時代にさかのぼり、現在もなおその伝統技法は近代機械工業との軋轢を経て生活実用品の中にも脈々と受け継がれていますが、将来に向け、特殊なジャンルの商品としてしまうのではなく、その存在意義を現実社会の中にどう位置付けてゆくのか、工業製品としていかに普及されるべきかが課題となっています。

この展覧会では、明治大学が取り組む漆関係の研究 — 「縄文時代の漆文化」「現代商品としての漆器」「次世代高機能材料としての漆」、そして、大学創立130周年記念事業の共通コンセプト「世界へ」をテーマに、我が国の漆文化を再考する機会をご提供します。

神秘の物質を科学する — 漆の科学分析 —

知っているようで知らなかった。漆の意外な素顔が神秘のベールをぬぎます。最初に“漆”とは一体どのような物質なのかを問います。

“乾く”と言われる漆ですが、実は、湿った空気にさらすとよく固化し、いったん固まると器物の耐水性、耐久性を高め、顔料を添加して色を表現したり、装飾用の素材を器面に接着することもできます。ここでは、科学分析によって明らかになった漆の成分、固化のメカニズムを明らかにします。



漆の固化に関する実験

関連企画 明治大学リバティアカデミー講座

■オープン講座「漆文化のはじまりと広がり」

2011年7月2日(土) 13:00~17:00

漆とは何か? (宮腰哲雄・理工学部応用化学科教授) / 縄文時代の漆文化 (阿部芳郎・文学部史学地理学科教授) / アジアの漆文化 (宮里正子・沖縄県立芸術大学、沖縄国際大学非常勤講師) / 科学の目から見る“漆”の世界 (本多貴之・理工学部兼任講師)

●会場 リバティタワーB1F 1001教室

※どなたでも受講できます 受講料¥1000 リバティアカデミー会員は無料 (事前申し込みが必要です 右記リバティアカデミー事務局まで申し込み下さい)

人はなぜ漆を使うのか？ —縄文時代の漆文化—

人が漆を利用し始めた初期の形態を探ってみることにします。漆利用は年代的にも古く遡り、約9000年前という説があります。ここでの着眼点としては、漆を塗るもの、塗らないものの対比、赤い色を着けること、赤と黒で絵柄を表現すること、光沢のある器面を表現すること、祭祀に関わるあるいは呪術的な意味をもつのか、実用としての機能性を求めて塗られたのか？当時の漆芸技術を示す貴重な遺物も展示します。



竹を編んだ籃胎に漆を塗っている
(川口市遺跡調査会蔵)



木胎漆器の口縁の一部
(北区飛鳥山博物館蔵)



漆を入れていた土器
(桶川市教育委員会蔵)

歴史の中の漆器

その後、我が国の漆芸技術は飛躍的な進歩を見せます。ここでは、古代～近世における漆器利用と、ヨーロッパ人による高い評価があったことなどを概観します。貴族や武家による高級調度の利用、寺院や城郭建築における建材としての需要、庶民も含めて広汎に使用された汁椀等の実用品など。

Japan wareとしてヨーロッパ世界に名の通った日本漆芸を象徴的に提示します。



秀吉の大坂城に用いられた金箔瓦



17～18世紀の琉球漆器
中国皇帝へ進貢されていたもの
(浦添市美術館蔵)



旗本屋敷跡から発掘された椀

アジアに広がる漆文化

漆の文化をもつのは日本だけではなく、漆器はアジアに共通の文化です。中国、朝鮮半島、沖縄（琉球）、ベトナム、タイ、ラオス、ミャンマーと、各国・地域ごとにその生活文化を背景としたさまざまな漆器が作られ、使われてきました。ここでは、遙か海を越えてやって来た、アジア各地の特色を反映した個性的な漆器を一堂に展示します。



金箔が鮮やかなタイの漆器
(浦添市美術館蔵)

■漆アカデミー「漆を知り、使って楽しむ」

2011年6～7月の土曜日 15:00～16:30 全6講

- 6/11 漆の魅力(宮腰哲雄・理工学部応用化学科教授)
- 6/18 漆の年代と産地(吉田邦夫・東京大学総合研究博物館准教授)
- 6/25 江戸の漆器椀(追川吉生・文学部兼任講師)
- 7/9 暮らしの器をプロデュースする(桐本泰一・輪島キリモト代表補佐)
- 7/16 漆の弱点を考える(神谷嘉美・東京都立産業技術研究センター研究員)
- 7/23 漆器製品の見方・買い方(外山 徹・博物館学芸員)

※受講には明治大学リバティアカデミーへの入会が必要となります 受講料15,000円

問合先 明治大学リバティアカデミー事務局 03-3296-4423 <http://academy.meiji.jp>
「リバティアカデミー総合案内」配布中 [リバティアカデミーでは多彩な講座を開講しています](#)

今われわれは？ —漆器の現在—

あなたは漆器を使っていますか？ 我々は今、生活の中でどのように漆器と関係を取り結んでいるのでしょうか？ 高度成長期には一般家庭でも購入されるようになった様々な漆器、正月用品に象徴されるハレの器、戦後における合成漆器の開発と生産、伝統漆器が身近ではなくなった中においてもそのデザインが影響を及ぼしている点、「ホンモノの漆器を普段使いに」をアピールし、漆の質感にこだわった近年の商品開発までを取り上げます。



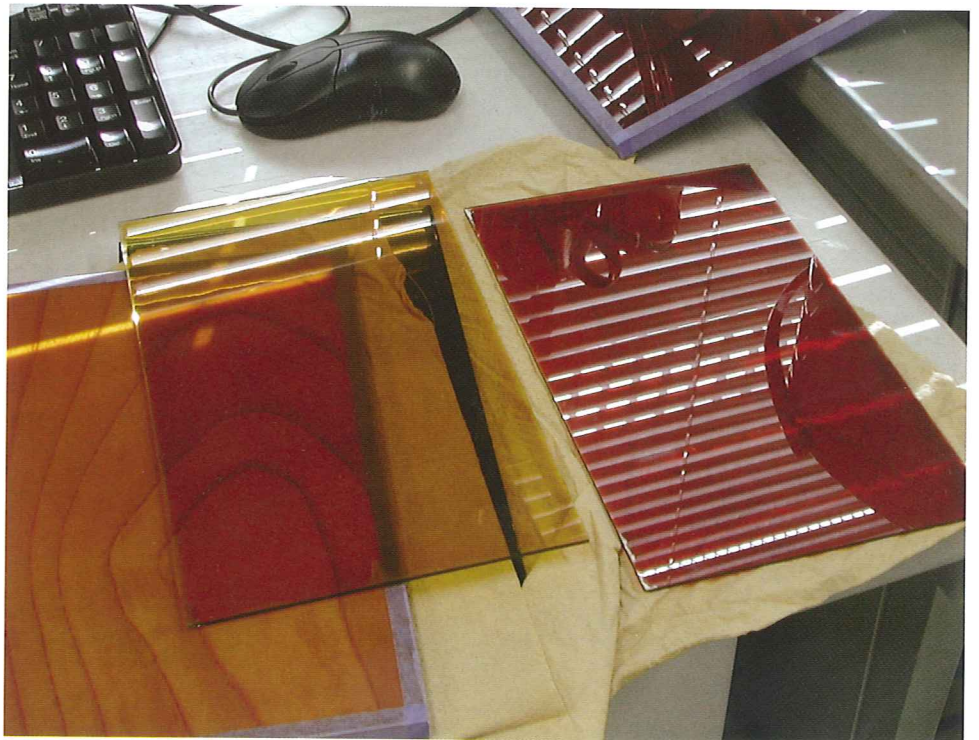
ホンモノの漆の質感にこだわった
輪島キリモト社の製品



高度経済成長の頃の漆器製品

漆利用の可能性を拓く —一次世代高機能材料としての漆開発—

合成漆器普及の背景には伝統的な漆芸技法が量産・普及に対応できないという理由がありました。問題は、固化に時間を要する、美しい艶を出すためには手間ひまかけた研磨や高度な塗り技法が求められること、作業工程の機械化ができない、といった点でした。そこで、これらの課題をクリアすべく開発された、有機ケイ素化合物の添加によるハイブリッド漆、漆の粒子を小さくして使用性を高めたナノ漆による新しい漆利用の可能性を提示します。



- 主催 明治大学博物館
- 共同企画 明治大学バイオ資源化学研究所 明治大学日本先史文化研究所
- 会期 2011年6月18日(土)～7月31日(日) 開館時間 10:00～17:00 会期中無休
- 会場 明治大学博物館特別展示室(駿河台キャンパス・アカデミーコモン地下1階)
- 入場料 ¥300 明治大学学生・教職員、高校生以下の児童・生徒及び引率教諭、明治大学博物館友の会会員、明治大学リバティアカデミー会員、明大カード会員、身体障害者手帳・愛の手帳所持者とその介助者は無料
- 問合せ先 明治大学博物館事務室 03-3296-4448 <http://www.meiji.ac.jp/museum/>